

インターンシップ体験記 （海外インターンシップの場合は英語で記入）

本インターンシップは、実社会の課題に対して技術で価値を生み出す力を身につけることを目的として参加した。大学院では研究活動を通して理論的な検証や仮説構築に取り組んできたが、社会で実際に使われるシステムがどのように設計され、構築され、運用されていくのかを体系的に理解する機会は限られていた。そこで、受託開発を主軸とし、AI や数値最適化を用いて実課題を解決している株式会社 Mark Door のインターンシップに参加し、技術的な知見を実務へ接続する経験を得たいと考えた。

準備期間では、実務レベルのエンジニアリングに触れるため、個人開発としてアプリケーションを一から構築する経験を積んだ。要件定義から始め、Figma で画面遷移図を作成し、データベース設計、フロントエンド・バックエンド実装まで一貫して行った。完成したアプリは、実際にスタッフとして所属していた予備校へ導入し、現場からフィードバックを受けながら改善を繰り返す運用まで経験した。実装そのものよりも、利用者が本当に必要としている機能を言語化し、仕様へ落とし込む工程が難しく、要件の曖昧さが後工程の負債になることを実感した。初めて触れる技術や設計概念も多く、開発途中で詰まる場面も多発したが、AI や知人エンジニアの助言を取り入れながら試行錯誤を重ね、課題を一つずつ解消した。この経験を通じて、技術力だけでなく、問題を構造化し、粘り強く解決へ導く姿勢の重要性を学んだ。

インターンシップ本体では、自社 Web サイト刷新、ランディングページ機能開発、製造業向け最適化システムの UI 開発など、複数のプロジェクトに関与した。いずれも単なる実装作業ではなく、事業目的やユーザー像を踏まえた設計判断が求められる業務であり、研究室とは異なる意思決定のスピードと責任感を体験した。特に印象的だったのは、チームで一つのプロダクトをゼロから作り上げていくプロセスである。クライアントや社内メンバーとの認識のずれが頻繁に発生し、想定していた仕様がそのまま通用しない場面も多かった。自分が良いと考えた設計が必ずしも使いやすさや業務効率につながるとは限らず、相手の立場に立った仮説検証と修正の繰り返しが必要だった。

複数人で開発を進める難しさも強く実感した。一人で完結する開発とは異なり、他メンバーが書いたコードとの整合性、仕様の共有不足による不具合、レビューを通した設計方針のすり合わせなど、コミュニケーションの質が成果物の品質に直結する構造が存在する。特に、事前のすり合わせが不十分なまま実装を進めると、後工程で大きな修正コストが発生することを何度も体験した。タスク開始前に目的・前提・完成イメージを明確に共有する重要性を強く認識した。

また、技術を知らない関係者に対して、システムがどのように動き、どのような価値を生み出しているのかを説明する力の重要性にも気づいた。専門用語を避け、業務視点で効果を伝える説明ができなければ、どれほど良い技術でも正しく評価されない。技術とビジネスをつなぐ翻訳的な役割の必要性を実感した点は、今後の研究活動やキャリア設計においても大きな示唆となった。

本インターンシップを通じて成長した点は、技術的なスキルだけではなく、チームで価値を生み出す難しさと可能性の両面を理解できたことである。個人では到達できないスケールの価値を、役割分担と協働によって実現できることを体感した。一方で、より多様な技術領域に踏み込む時間を十分に確保できなかった点は課題として残った。今後は、専門分野に加えて周辺技術への理解も意識的に広げ、より俯瞰的な視点でシステム設計ができるエンジニア・研究者を目指したい。

研究室との違いとして強く感じたのは、成果物が日常的に利用される前提で評価される点である。研究では論文や発表が主なアウトプットとなるが、実務では「使われ続けるか」「業務が改善されるか」が価値の基準となる。ユーザーの行動や心理を想定しながら設計する視点は、研究とは異なる難しさと面白さが存在した。

生活面については自宅からの参加であったため、宿泊や治安、物価などの変化は特になかった。ただし、リモート環境において自己管理能力とコミュニケーションの主体性が強く求められる点は大きな学びとなった。自ら積極的に相談・共有する姿勢がなければ成果につながらない構造である。

インターンシップ体験記 （続き）

本体験を通じて最も重要だと感じたのは、博士人材として専門性を深めるだけでなく、社会との接点を意識し続ける姿勢である。技術を研究するだけでなく、それを誰のどんな課題にどう届けるのかを考え続けることで、研究の価値も拡張される。実務の現場に身を置いた経験は、自身の研究テーマの社会的意味を再考するきっかけとなり、将来的により実装志向の研究へと発展させたいという動機づけにもつながった。

本インターンシップは、技術力の向上に留まらず、課題設定力、コミュニケーション力、チーム協働力、社会実装への視座を獲得する貴重な機会となった。今後インターンシップに参加する後輩の皆様にとっても、研究と実務を接続する経験は大きな学びになると考える。目的意識を明確に持ち、積極的に挑戦することで、得られる成長の幅は大きく広がると考える。

最後に、インターン期間中、HW 事務局への定期報告が複数回遅延してしまった点について反省している。定期報告は単なる事務手続きではなく、遠隔実習における安否確認および活動状況の把握を目的とした重要な安全管理プロセスであるにもかかわらず、その重要性を十分に認識できていなかったことが主な原因である。また、日々の業務タスクを優先するあまり、報告期限を個人の記憶に依存した管理にしてしまい、結果として抜け漏れが発生した点も問題であった。

この反省を踏まえ、報告期限をスマートフォンのリマインドアプリに登録し、複数回の通知設定を行う運用に切り替えたことで、以降は期限を安定して遵守できるようになった。この経験から、自己管理を個人の注意力に依存させるのではなく、仕組みによって担保することの重要性を学んだ。また、リモート環境では周囲からの自然なリマインドが得られにくいため、自律的な管理設計が不可欠であることを実感した。

今後は、締切管理や安全確認に関わるルールを「作業の一部」として明確に位置づけ、技術的な成果だけでなく、社会的責任を伴う行動の確実性も含めて自己管理能力を高めていきたい。